

氏名	ゆあさ けんじろう 湯浅 健次郎
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博乙第205号
学位授与の日付	平成28年9月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	會津八一研究 学芸における表現と演出
審査委員	(主査)教授 並木誠士 教授 伊藤 徹 教授 秋富克哉 准教授 三木順子

論文内容の要旨

本論文は、歌人、書家、美術史研究者など、多分野で活躍した會津八一(1881-1956)の学問・芸術における表現と演出について論じるものである。

論文は二部で構成され、第一部(第1章～第3章)では會津の学術、とくに美術史研究について論述し、第二部(第4章～第7章)では、書をはじめとする會津の芸術表現について考察している。

第1章「會津八一と古美術写真」では、會津がおこなった古美術写真の監修について考察している。写真は、近代の美術史研究において、もっとも重要な道具であった。會津はその写真に注目し、独自の視点で古美術写真の監修をおこなっている。この章では、彼の監修によって、単なる「記録」から、芸術的な「鑑賞」にも堪えるものへと写真の位置が高まったことを明らかにしている。

第2章「美術研究と写真：雑誌『東洋美術』に関する一考察」では、會津が出版に参画した美術研究誌『東洋美術』に注目する。この雑誌は、第1章で取り上げた写真出版社飛鳥園が刊行したもので、會津は「私の雑誌」と呼び、自身の論文を掲載している。これまで注目されてこなかった會津の雑誌への関わりと、『東洋美術』が「見る」と「読む」を兼ね備えた学術雑誌であることを明らかにしている。

第3章「會津八一における鑑賞の実践—図版集『支那明器泥像』の試み」では、會津の教材作成から、研究における鑑賞の態度を検討した。會津は、美術史研究における鑑賞の重要性を主張し、その成果を論文で発表している。その態度は彼が制作した美術史教材、資料にも浸透していた。會津の制作した図版集『支那明器泥像』は、その最良の事例となることを明らかにしている。

第4章「會津八一の奈良歌が目指したもの」では、奈良を詠んだ短歌、通称「奈良歌」を取り上げ、第一歌集『南京新唱』発表当時に寄せられた批評と、それに対する會津の反応から、彼の奈良歌が目指したもの、注釈を要する理由を明らかにしている。

第5章「會津八一における書の近代性 活字との関係から」では、會津の書と活字の関係について検討した。會津は古代中国文字から現代の活字まで研究し、自身の書を築いたといわれている。しかし、これまで活字からの影響は、同時代の書家と比較した際の特異な一面として挙げられるのみで、詳細に分析されてこなかった。この章では、會津の言及を整理することで、彼の書と活字の関係、近代的側面を明らかにしている。

第6章「會津八一の合作における個性と調和」では、第4章、第5章での短歌と書の検討を念頭に置いて、會津と芸術家たちとの合作を取り上げた。會津はオリジナリティとみずからの個性を重んじた芸術家であり、他者と合作をおこなうことは、一見、矛盾する態度とも思える。しかし、この章では、さまざまな事例をたどることで、會津の合作は、自身の表現の芸術的効果を追求する試みだったことを明らかにしている。

第7章「短歌「川開き」と故郷のイメージ」では、前章の合作の考察を踏まえつつ、昭和4（1929）年に刊行された版画出版物に添付された短歌「川開き」を取り上げる。近年発見されたこの短歌は新潟の情景を詠んだもので、版画作品との関係、時代背景などから、新潟で詠まれたこの短歌の重要性を指摘している。

上記の構成をもつ本論全体で論じられているのは、會津の学芸が、文学の心得や美術史研究、書作など、総合的な理解、教養がなければ味わうことができない難解さを有するだけでなく、さまざまな見せ方の工夫が凝らされ、鑑賞者に開かれた表現であるである。

論文審査の結果の要旨

會津八一（1881-1956）は、歌人、書家、美術史研究者など、多分野で活躍した人物である。

これまで、會津に関する研究は、書や短歌の作品批評など、彼の生前から数多く発表されてきた。とくに門下生や親交のあった人びとは、彼の没後に『會津八一全集』をはじめ、歌碑建立などの顕彰事業を積極的におこなっている。そのようななか、申請者は、新潟市會津八一記念館に学芸員として勤務して、先行研究および既出資料を丹念に検証し、同時に、新出資料を積極的に発表して、會津八一研究に新しい地平を切り開いている。本論文の第一の意義は、まずこの点にある。

これまでの研究では、會津の学芸全般について、深い教養を含んだ難解なものであるとして、文人、天才というような漠然とした言葉で片付けてきた憾がある。門下生の安藤更生も、會津を「レオナルド的天才」と称している。このような見方に対して、申請者は、會津の研究面・芸術面それぞれの表現を詳細に検討することにより、會津がみずからの表現を他者に理解してもらえるように配慮していたことを具体的に指摘している。とくに、會津が牽引者の一人である初期の日本美術史研究における表現の工夫について、「写真」に注目して論じている点は本論文の重要な新規性の一つとなっている。また、芸術表現面では、これまでほとんど注目をされていなかった「活字」と「合作」という点に着目し、その分析を通して、他者と共有しうる會津の表現のひろがりについて論じている。これも、會津研究にあらたな視点を提供するものであり、研究上の意義は大きい。

以上のように、本論文は、會津八一についての膨大な資料を新たな視点から捉えなおし、これまでの固定化した會津像の見直しを迫るものであり、その新規性と学問的な意義は大きい。

なお、本論文の一部は、いずれも申請者の単著である査読付の3論文（①②④）および査読無し論文（③）として、すでに公表されている。

①湯浅健次郎：「會津八一と古美術写真」民族藝術学会『民族藝術』第27号、206-214頁（2011年）

②湯浅健次郎：「美術研究と写真—雑誌『東洋美術』に関する一考察—」日本フェノロサ学会

『LOTUS』第33号、22-38頁（2013年）

- ③湯浅健次郎：「會津八一の奈良歌が目指したもの」新潟市會津八一記念館メディアショップ移転特別展図録『會津八一の奈良一歌集『鹿鳴集』の世界』、16-20頁（2014年）
- ④湯浅健次郎：「濱谷浩の肖像写真—「會津八一博士を写す」と往復書簡」新潟県博物館協議会『研究紀要』1号、15-22頁（2014年）